

黄村先生言行録

大山椒魚事件

北村 想

登場人物

黄村先生（作家・六十二歳）

谷水流（たにみず） ながる、編集者・三十代半ば）

海野冴子（うみの さえこ、編集者・三十歳前後）

お絵描きさん（まだ十代らしい女性）

酒井典子（さかい みちこ 療養院の女医・四十代前後）

杉田（患者・五十代）

高木（患者、杉田と同輩）

武道家（と、呼ばれている患者）

かき氷屋の親父（実は・・・）

1・発端

太宰治は、黄村先生のシリーズを三作残しているが、本作はそれに名を借りた、或いは想を得たミザンセーヌ・ミステリだと思ってもらえばイイ。

さて、ここに、かき氷の店がある。

親父が、火の点いていない煙草を加えてタブロイド新聞（あるいはスポーツ・芸能・公営ギャンブルが満載された新聞）などを読んでいる。

それらしき縁台の兄弟分のような椅子が置かれて（その数も、まあ、バランスがとれているという程度で）、そこで、男女が、かき氷を食べつつ歓談（というより、愚痴をいっているようにもみえるが）している。どちらも同業者、おそらくは、雑誌か文芸誌の編集者ら

しい。

男のほうは、谷水流（と、まあ、イイカゲンな命名ではあるのは認めるが）、女性のほうは海野冴子というふうに（いま思いついたので）しておこう。もちろん、季節は夏だ。

海野 （仰天した様子で）で、いよいよ施設に入れられちゃったのお。

谷水 いや、だから、入れられたというより、入っちゃったんだ、正確に言えば。

海野 入ったって、どうよ。

谷水 だから、誰が勧めたのか、ボクは知らないよ。黄村先生ご自身で、すすんでお入りになったというか、ね。

海野 でも、どうして。

谷水 だから、黄村先生が、おっしゃるには、もう俗世間には厭きた、とはいえ、隠遁や遁世、隠者のようなバカな真似はしたくはナイ。

海野 なんて、遁世や隠者が、バカな真似なの。

谷水 知らないよ。施設に入るんだって、あんまり変わんないとは思っただけ。

海野 そうよ。  
谷水 しかし、黄村先生のおっしゃるには、歴史上の遁世なんざ、みんなニセモノだと、こうなんだ。

海野 ニセモノ。

谷水 そう。そんなことは、この歳になって独り暮らしをすればワカルって。だいたい、世間から離れようが、たとえ、西表島に住もうが、北方領土で暮らそうが、人間は食わねば生きられない。水も食料も、茶碗に箸も必要だ。ビールだって飲みたくなるだろう。そうすると冷蔵庫が、

海野 ちよっと、待ってよ。黄村先生の奥さん、まだインドなの。

谷水 そう、インドに留学中。若いからなあ。

海野 いくら歳の差があるからって、独身じゃナイんだから。いま独り暮らしだといつても、遁世やら、隠遁やら、俗世間がどうやらというのは、

谷水 いや、それぞれ、それが、黄村先生のいつもの理屈、いや、理屈というと叱られるから論理さ。

海野 俗世間に厭きたって、黄村先生はいつだって、そうじゃない。

谷水 ああ、そうだ。その通り。あれは、まだ春先だったかな。この先の井の頭公園を二人で散歩といつても、ボクが原稿待ちでくっついて歩いていただけだけどね、ボクが咲いたばかりの梅を指さして、先生、梅が、という。くああ、梅。やっぱり梅は、紅梅よりも白梅のほうがいいよね、という。くいいものだ。梅を観もしないで、行こうとされる。先生、花はお嫌いですか、という。くたいへん好きだ。といいながら、何の興味もないみたいなんだ。

海野 そうそう、それで、くお、美人が。と、メツチェンだけには目が早いんですよ。

谷水 そう。そこで、美人なんかじゃありませんよ、といおうものなら。くそうかね、二人と見えだが。と、くる。蕎麦じゃナイっての。

海野 呆れるというより、こつちが赤面しちゃうわよ。

谷水 さほども歩いていないのに、く疲れたね休もうか。そうですね、もう少し行くと見晴らしのイイ茶店がありますが。く同じことだよ。で、イチバン汚い茶店に入っただけ。で、く

何か食べたいね。そうですね、甘酒かおしるこはどうでしょう。く何か食べたいね。つまりは空腹ということらしいんだ。で、そうですか、さあ、他には何も美味しいものなんて、ありそうにナイですよ。そうしたら、く親子丼のようなものがナイだろうか。あの歳で大食いなんだ。茶店で親子丼はないだろう。そこで、茶店のものに頼んでつくってもらおうと、く丼も大きいし、ごはんの量も多いね。と、こうさ。それで皮肉のつもりで、でも、不味かったでしょ、という。くまずいね。ほんとにもうまいるよ。ミステリ文壇に関係がなかったら、襟首でも挿んでやるところさ。いくら、奇人変人を通っているにしても、程度というものがあるだろ。

海野 で、どんな施設に入ったの。奇人変人向けの療養施設かしら。というのは冗談だとして、ひよつとして、老人ホームか何かなの。

谷水 それが、アルコール依存症の治療施設なんだ。

海野 アルコール依存症の。

谷水 そう。

海野 どうして、そんな。

谷水 そこがまた、黄村先生一流の論理さ。く普通の人間より面白そうなのがいるんじゃないかね。

海野 まあ、黄村先生らしいといえば、そうだけだ。

谷水 だろ。

海野 で、何処の病院、いえ、施設に。

谷水 それがね、確かにアルコール依存症の治療専門の病院なんだけど、瘋癲療養院なんて、名前からして怪しい妙な施設でね。たしかに妙らしいんだ。

海野 妙って。

谷水 もともとは、なんとかかという貴族だか、華族だか、皇族の末裔だかが住んでいた屋敷だったらしいんだけど、そこを改装したそうで、その貴族が趣味が風変わりで、敷地内に、水族館なんかを持っていたのを、そのまま残してあるんだ。

海野 水族館付きのアルコール依存症施設。なんとなくいまふうにも聞こえるけど。

谷水 いやあ、まったく。広い庭園があるんだが、これが、いわゆる廃園だ。廃屋の庭園さ。何の手入れもされていない。ボクも写真で観ただけなんだけど。

海野 まあ、俗世間からは離れてるわね。

谷水 まるで、小栗虫太郎のミステリにも出てきそうなところだよ。いや、そりゃあ、ちよつと古いかな。そうね、京極夏彦あたりかな。

海野 でも、どんなところだろうと、原稿は取りにいかないよ。

谷水 そりゃあ、仕事だから、仕方がナイけどねえ。あの黄村先生にして、あの廃園、それに水族館、なんだかまた、例の退屈なご高説を承るのかと思うと億劫だな。

と、その当事者が、ハンチングを被り、片手に小さな風呂敷包みを下げて立っている。

黄村 (欠伸をひとつしてから) 私の、そのご高説とやらは、そんなに退屈ですか。

谷水・海野 (ギョツとして振り向くと) せ、先生。

谷水 黄村先生じゃありませんか。

海野 いつから、そこに。

黄村 デボン、オルドビス、白亜紀に生物が大量絶滅するよりは後ですが。北極の氷が溶けだすよ

り前に、きみたちの手にあるかき氷の、イチゴとメロンが溶けだす頃からでしょうかね。

谷水 何か、施設にお入りになったとお聞きしておりましたが。

黄村 何かじゃナイでしょ。

谷水 ああ、そうですが。

黄村 私はちゃんと、申し上げましたよ。

海野 我が社には、まだ、連絡がきておりませんが。

黄村 手続きは済ませましたよ。海野くんのところには、まだ、連絡がいつておりませんでしたか。

海野 はい、いまここで、谷水さんから、聞いたばかりです。

黄村 手違いと行き違いは、何処にでもありますから。間違いと、ナントカチガイも同様です。ナントカには「キ」と入れたいところではありますが、どうせ、校閲で書き換えられるだけですから。

谷水 で、いまから、その、

黄村 ええ、瘋癲療養院のほうに参ります。手続きは済ませましたよ。ただ、ちよいと準備という

ものが必要なんで、生活資材を取りにもどったというワケです。(と、風呂敷包みをみせる)

海野 生活資材、その風呂敷包みが。

黄村 ですから、歯ブラシ、電動髭剃り、石鹸、手拭い、アトは、忘れましたが。

海野 あの、パジャマや、お着替えのほうとかは。

黄村 さすがに女性ですね。じゃあ、それは、海野くんに頼むことにしましょう。

海野 えっ、

黄村 我が愛する若き伴侶は、いま留学中ですから、ね。インド、なんたる奇妙な国でしょうか。

東洋哲学の発祥の地であり、いまなお身分差別や貧困の格差があり、そうして、国民総生産では、中国を抜いている。かつてはゼロ(0)を発見し、いままた数学者が溢れている。おそらくこの先半世紀のちには、世界の中心となります。しかし、その世界の中心で、誰が愛を叫ぶのでしょうか。いや、これは古過ぎました。実に古い。というか、愛などというものは、叫ぶものではありません。では、何なのか。そんなことは私より頭のイイひとが考えるべきです。ああ、海野くん、それから、ウイスキーのポケット瓶を三本ばかり、持ってきて下さい。

海野 ええっ、

谷水 ご冗談でしょ。

海野 だって、黄村先生は、アルコール依存症の治療施設に。

黄村 私はまだ依存症ではナイ。

谷水 しかし、

黄村 いやいや、一興、一興。アルコール依存症の患者の中に交じって、こっそり、ウイスキーのポケット瓶を飲む。これ、冒険ですな。

谷水 勘弁して下さいよ。

海野 あの、

黄村 ああ、海野くんが何を聞きたいのかはワカリマス。私がどうしてここに現れたか。つまり、どうして、谷水くんと二人でここにいることが、私に伝わったか、ですね。

海野 そ、そうですけど。

黄村 それは、あの親父さんです。

かき氷屋の親父、タブロイド新聞を外して顔をみせると、谷水、海野に向けて、微笑みながらコクンと頭を傾ける。挨拶のつもりらしい。

海野 あの、親父さんが、何を。

黄村 あなたたちのデートコースくらい、私、存じております。もちろん、そんなコースなんざ、幾つもお持ちでしょう。で、そのうちの一つ、井の頭公園に現れたなら、おそらくこの時刻、ここにかき氷でも召し上がるのではナイかと。昨今は、携帯メールという便利なものがありますからね。

親父が携帯電話をこれ見よがしにみせる。

海野 (あの親父さんと) お知り合いなんですか。

黄村 これでも、テキ屋の連中には顔が利くんです。

谷水 でも、そんな面倒なことをなさらなくとも、用事があるのなら、社のほうに。

黄村 私が瘋癲療養院に入るのは、口外無用、の、はずでしたね、谷水くん。

谷水 えっ、あ、はい。

黄村 それを、ペラペラと海野くんに喋ってしまった。いや、謝る必要はありません。おそらくそうなるだろうと、思っていましたから。従って、今後は、私の瘋癲療養院への入院は、この三人だけの秘密ということになります。

海野 三人だけの秘密って、どういうことなんですか。

黄村 秘密は、秘密です。秘密を持つと、ひとは何だかウキウキしますね。

谷水 ウキウキなんて、そんなのは、先生だけですよ。

黄村 そうですか。まあ、よろしい。さて、私は、行かねばなりません。海野くん。

海野 はい。

黄村 パンツは、ブリーフは避けて下さい。トランクスタイプです。では、適宜なるときにお会いいたしましょう。

黄村先生は、スタスタと去った。

谷水 (興味津々の面構えで) 知らなかったなあ。

海野 えっ、何を。(と、やや期待値が大きい)

谷水 黄村先生がブリーフ派じゃなくて、トランクス派だということは。

海野 バカ。(小さく、ため息)

ここで、時間を飛ばして（前後することになるが）、空間を移動して、いきなり瘋癲療養院に残されたる水族館に物語を運ぶ。

薄暗い水族館。もちろん、具象的なものは何も必要ではナイ。かといってまったくの抽象でも、良くない。なるほど水族館のようだ。など潜在的に思われる風景が必要だ。

まるで、回り燈籠の中にいるような、動く影絵の世界にいるような、ただ、魚影らしきものはみえるのだが、それがどういう種類の魚類、水棲類なのかは、曇りガラスの向こうをみるようでハッキリとはしない。そのような、やや、病的なメンタルな風景だ。

そこを、黄村と、谷水と、海野が、水槽を観ながら歩いている。

谷水 先生、こりや、鯉ですか。真鯉かな、緋鯉かな。見事ですな。

黄村 見事だね。

海野 あっ、これは鮎ですか。鮎はやつぱり姿がいいですね。

黄村 ああ、泳いでいる。

谷水 おっ、今度は鰻だ。

海野 ほんと、ウナギ。

谷水 面白いですね。みんな砂の上に寝そべってやがる。先生、ちゃんと観てらっしゃるんですね。

黄村 うん、鰻、生きていますね。

海野 でも、この水族館は、淡水魚ばかりですね。海の魚は見当たりません。

黄村 おおっ、いいところに気がつきました。さすがは海野くん。谷水くんとは観ているものが違います。

谷水 一緒ですよ。

黄村 谷水なら谷の水で、淡水。海野なら海で海水。本来なら逆なんですけど、逆ゆえに、海野くんが先に気がついたんですね。

谷水 そりゃあ、こじつけじゃアリマセンか。

黄村 さて、次なる水槽です。何だかワカリますか。

海野 ナンです、このグロテスクなの。

谷水 これは、ハンザキかな。

黄村 おおっ、そうです。谷水くん、お見事っ。これこそ、きみがいまいった、ハンザキです。

海野 ハンザキ。

谷水 山椒魚ですよ。

黄村 そうっ、これぞ、山椒魚ですっ。

谷水 何を感じられているのかワカリマセンが、黄村先生は山椒魚が好きだったんですか。

黄村 悔ってはイケマセン。この山椒魚こそ、両棲類中の有尾類、驚くべきものです。

海野 （谷水に）ねえっ、ハンザキって何なの。

谷水 だから、山椒魚だよ。

海野 どうしてハンザキっていうの。

谷水 半分に割いても生きているらしいからさ。

海野 生命力が強いってこと。

谷水 食用になるんだ。山椒の香りがして、味は牛肉に近いらしい。白土三平さんの『カムイ伝・第二部』だったかに出てくるよ。ビタミンAが豊富で、鳥目なんかにやいいそうで、薬用にもなるって聞いたけど、いまは天然記念物で、捕獲禁止されている。

黄村 よろしい、いや、谷水くん、見直しました。最近の編集者や、映画のproducerはマンガしか読んでいないらしいが、白土三平を読んでいるなら、よしとしましょう。

谷水 ありがたい、おコトバで。

黄村 しかし、ハンザギが登場するのは、『カムイ伝・第二部』ではなくて、『カムイ外伝』です。外題もそのまま「はんざぎ」です。たしか、こうです。いつものごとく、とある剣客を斬り倒したカムイは、死体を山中の炭焼き釜で焼こうとします。そこに現れる父娘。これが陶芸家というふうになっているのですが、抜け忍であります。そこで、一緒にハンザギの串焼きを食すのですが、そこでカムイは、その父娘に向かってこういいます。くこやつは、いくら細切れにしても死なんという。そこからまた手足がはえ、生まれるそうな。泣きもせず涙も流さず、たまに交合うて食うのみ。人が死んでも、こやつは人知れず岩陰に身をひそめ、ひたすら生き続ける。うらやましきかな。くそうでしたね、谷水くん。

谷水 ええ、私はさほど記憶には、

黄村 よろしいですか、諸君。

谷水 諸君たって、二人しかおりませんが。

黄村 ここ、この水族館は、療養院に改築されてからは、淡水魚をいろいろと育てておりますが、もともとは、すべての水槽に身の丈の順に、この水槽すべてに、山椒魚が飼われていたのです。海野 山椒魚だけが、ですか。

黄村 そうです。最も大きいものでは、三丈あったと記録にあります。

海野 三丈。三丈というと、

谷水 一丈が3メートルちよつとだから、10メートル近い大きさはありませんか。

海野 普通はどれくらい。

谷水 さあ。

黄村 現存しているオオサンショウウオは大きなもので、150センチ、つまり1メートル50センチです。しかし、ここには三丈、10メートル近いオオサンショウウオが、存在していたのです。

谷水 幾らなんでも、黄村先生、それは。

黄村 記録にあるのだから、そうなのです。

谷水 何だかもう、小栗虫太郎というより、香山滋になってきちゃったな。

海野 香山滋って、あのゴジラの、

谷水 そう、原作者。

海野 あ、黄村先生。

黄村 なんです。

海野 記録がどうのっておっしゃってますが、どんな記録なんですか。

黄村 この療養院の屋敷の元の持ち主、華族だった市川侯爵が残した『山椒魚育成録』という記録です。

海野 それって、信憑性のほどは。

黄村 信憑性、何ですか、そんなもの。よろしいですか、市川侯爵が記録として残されているので、すから、何故、それを信じられないのです。思ってもみるがイイ。

谷水 始まりましたね。

黄村 何がです。退屈なご高説ですか。

谷水 いえ、別に。

黄村 太古の動物が太古の姿そのまま、いまもなお悠然とこの日本の谷川に棲息し、繁殖し、また静かにものを思いつつある様は、これぞまさしく神ながら、万古不易の豊葦原瑞穂国（とよはしはらみずほのくに）、かの八岐大蛇（やまたのおろち）、または稲羽の兎の皮を剥いだる和邇（わに）なるもの、すべてこの山椒魚ではなかったかと、

谷水 そりゃ、脱線ですよ。

黄村 いいえ、きみたちは、

海野 きみたちって、私は何も反論していませんが。

黄村 最も注視されるべきは、この山椒魚たるや、両棲類でありつつ、有尾類であるということなのです。きみたちは、魚類が何億年もかけて陸上に上陸し、

海野 陸上に上陸しというのは、馬から落馬する、あるいは被害を被るのと、同じ、

黄村 海から陸へと進化の道をたどる、その苦難の道程は如何ばかりであったでありましょうか。

鰓呼吸から肺呼吸へと、ここに進化の跡をみるならば、ちようどヒトの胎児の、おおよそ二カ月から三カ月、ここにココロというものが芽生える瞬間を、垣間見るのでありますが、なおかつ、有尾であるということは、類人猿としての進化をも残しつつ、かつ半分に分かれても、なおも河を泳いだということは、く瀬をはやみ 岩にせかるる 滝川の われても末に あはむとぞ思ふくという、崇徳院の詠みし一首にまで連なる、ヤマト文化の象徴として、この三丈のオオサンショウウオを、信ぜざるものは、よろしい、私は人の話を疑うヤツはまことに嫌いで、三丈、10メートルといったら信じたらいじやないか。

谷水 そう、怒らなくとも。

黄村 海野くんなどは、一目観て、これをグロテスクと断定いたしました、

海野 でも、グロですよ。

黄村 ならば、なにゆえ、きみたちは、居酒屋で、ナマコなんぞを食べるのか。あの海浜に漂う海鼠（なまこ）の姿が如何にグロテスクであるか。それに比して、山椒魚たるや、ひっそりと河口に潜み、おそらくは、我が人類ホモサピエンスにとって代わらんとするがごとく、未だ進化の過程にあるのです。さて、

谷水 まだ、つづくんだ。

黄村 ナンですか。

谷水 いえ、独り言です。

黄村 美作国（みまさかのくに）、作州（さくしゅう）、現在の岡山県、東北部に該りますが、その津山市から九里、おおよそ40・ばかり山奥に入ったところに、ハンザギ大明神というのを祀っている村があるそうです。何故、そのような社が必要となったのか、その神社の石碑に書かれたる逸話を読み解きますと、ある、恐ろしく強い、荒々しきハンザギが現れて、さかんに人間を獲って食べたそうです。これぞまさしく、身の丈三丈の巨大山椒魚に間違いありません。さて、そこは、物語の常として、英雄が現れねばなりません。ある勇士が現れて、ついにこれを



退治し、あとの祟りがないように早速、大明神として奉ったというワケです。これは『作陽誌』という書物に書かれてあつたらしいのですが、それが現存するのかどうか、不明です。ただ、市川侯爵の記録したる『育成録』には、そういうことも記されております。

海野 でも、黄村先生。

黄村 はい、ワカッテおります。海野くんの質問の類は、たいてい想定出来ます。

海野 あら、そうですか。

黄村 何故、市川侯爵が、そのように山椒魚にとり憑かれたようになったかと、私費を投じて、かくなる山椒魚水族館まで造りあげたのかと、概ね、そうでしょう。

海野 おおむね、そうですね。

谷水 まあ、そんなことは、海野くんじゃなくとも、質問したくはなりますが。

黄村 それは、どういう意味の反論ですか。

谷水 いえ、

黄村 また、独り言ですか。

谷水 ええ、まあ。

海野 で、何故なんですか。

黄村 ワカリマセン。

谷水・海野 へっ、

黄村 もう一度聞きますか。ワカラナイと、いったのです。

海野 なんだ。

谷水 ワカラナイんですか。

黄村 もちろん、何か動機はあつたはずですが。『山椒魚育成録』という記録の他に、市川侯爵の日記に準ずるものがあつて然るべきなのですが、これは発見されておりません。

谷水 墓まで持っていたとか。

黄村 何のためにです。

谷水 そ、それは。

黄村 何のために、自分の日記などを棺桶に入れる必要がありますか。もし、そうなら、

『育成録』だつて一緒に抱いて死ねばいい。私の考えでは、日記は、いずこかに、現存しているはずです。何故なら、『育成録』は単純なる記録でしかアリマセン。山椒魚研究の動機や目的を記

してはいないんです。ですから、そのようなモノがあつて然るべきだと、私は考えております。

谷水 何故、それだけ、出てこないんです。

黄村 そいつが、謎というものです。

廃園。

としか名付けようのない、廃れた中庭。

その、水も枯れて姿ばかりとなった噴水の縁に、黄村先生が腰掛けている。

時間は、水族館に三人が詣でるよりしばし、もどる。

ここは暗転がなく、水族館が消えゆくと、廃園が現れるという工夫がしたい。

黄村の傍に海野と谷水。

黄村はアルバムのようなものを繰りながら観ている。

黄村 ピクルスというのを知っていますね。

谷水 (突然何をいわれたのかという顔をしながら) えっ、ああ、はい。

海野 西洋のお漬物というか、あのピクルスですか。

黄村 他に何があります。たとえば、パピルスですか、それともカルピス。

谷水 パピ、いえ、ピクルスがなにか。

黄村 つまりだ、アルコール依存症患者というのは、いってみればピクルスです。西洋の漬物と同じです。

谷水 と、いいますと。

黄村 もっとも、新鮮な胡瓜を正常な人間としたならの話ですが。

谷水 ああ、つまり、どっぷりとアルコールに漬かっているってことですか。いや、ピクルスって、あれは

アルコールに漬かってたかな。

海野 あれってビネガーでしょ。

谷水 そうですよ。

黄村 いやいや、そういうことをいつてるんじゃない。要するに、ピクルスが元の胡瓜に絶対にもどらないように、アルコール依存者は、普通の人間にもどれないってことをいつているのです。

海野 つまり、あの、治らないってことですか。

黄村 治りますよ。しかし、アルコール依存者にとって治るということは、普通に酒が飲めるようになるということの意味しない。ここが、よく勘違いされているところなんですがね。ほんとうは飲めば、終わりですただの一杯でも飲めば、その場でまたここへ舞い戻る道を歩くことになる。

海野 治らないとどうなるんですか。

石川 死にます。

海野 死ぬんですか。

黄村 アルコール依存症は立派なれつきとした、疾病ですからね。疾病である以上は、治らなきゃ、一巻の

終わりってことです。

谷水 怖いですね。

黄村 何が。

谷水 いや、ですから。

黄村 死ぬことがですか。

谷水 ええ、まあ。

黄村 八木くん、人生の真理とは何でしょう。

谷水 人生の真理ですか。突然難問ですね。(海野に) な、

海野 (谷水のコトバを引き取らない) さあ。

黄村 簡単なことだ。人は死ぬ、必ず。これです。おワカリですか。

谷水 人は死ぬ、必ず。なるほど、それが真理ですか。

黄村 違いますか。

谷水 ええ、まあ。(海野に) そうだよな。

海野 (谷水ではなく黄村に答えて) はい、そうですね。

黄村 だから、死ぬことは怖くはない。何故なら、真理だからだ。真理を恐れて何になる。そんなものは、怖くも何ともナイ。

谷水 一種の悟りですか。

海野 それとも、諦め。

黄村 許諾です。

谷水 許諾。

海野 といいますと。

黄村 簡単にいえば、受け入れることに躊躇しないということです。

谷水 なるほど。

海野 (神妙な顔をしている)

黄村 まあ、よろしい。それより(アルバムを置いた) 例の、持ってきたんだろ。出したまえ。(手を差し出す)

海野 えっ、

黄村 頼んだでしょ。

海野 下着ですか。

黄村 トランクスなんて、三日は穿けます。もう一つのほうです。

海野 でも、いいんですか。こんなところで。不謹慎ですよ。

黄村 きみたちは私の小説が欲しい、そうして私は酒が欲しい。ところが、ここには酒はない。君のポケットにはそれがある。

谷水 しかし、先生。

海野 他の患者さんの手前もあるんじゃない。

黄村 私の通俗ミステリや、本格評論の類は出すたびに最低10万部は売れる。最高は45万部だ。ところで、私の貰う印税はたかが10%。後はきみたちの儲け。今までに出た私の数十冊の本のおかげで君たちは食べている、と言っても過言じゃないでしょ。

谷水 おっしゃる通りですけど。

黄村 だったら、素直に命令に従いたまえ。

海野 だって、ここは。

黄村 大丈夫ですよ。これをごらん。(ポケットから何か出して掌に乗せた)

海野 薬ですね。

黄村 シアナマイド、抗酒剤というやつです。これを服用してから酒を飲むと血圧が下がり、頭は痛み、心臓の鼓動は激しくなって吐き気がしてくる。

谷水 便利なものがあるんですね。

黄村 この患者には、このシアナマイドとノックビンという薬を巧みに使って、ともかく酒を飲めなくさせるんだが、どっこい、僕は服用するとみせかけて、こうして捨ててしまう。(噴水の中に捨てる)

海野 あっ、

黄村 飲酒したことが知れたら、敵は今度は注射で薬を投与するそうです。まあ、いうなれば、酒飲みにとってここは地獄です。まあ、私は、ホンモノの患者じゃありませんから。ちよつとした悪戯ですから。

海野 (ポケット壘を出す)

黄村 (ポケット壘の酒をグイとあおると) いや、こういう所で飲む酒は格別です。谷水くん、君も飲むかね。

谷水 そうですか。じゃあ、

海野 ちよつと、何いつてんですか。

谷水 そうだよな。私は遠慮しておきます。

黄村 そうかい。(美味そうに飲む) うむ、甘露、甘露。

海野 みつかりますよ。患者さん、こつち観てるんじゃないませんか。

黄村 (庭を見渡して) いい庭でしょ。

谷水 庭ですか。(眺めるが) 荒れ放題ですよ。

黄村 ここが療養院になる前は、市川侯爵の邸宅です。お屋敷です。さぞかし、立派な庭だったでしょう。終戦とともに貴族階級は廃止されました。1947年5月3日、貴族制度の禁止、憲法14条2項と法の下の平等、憲法14条1項を定めた日本国憲法の施行とともに廃止されたのです。当初の草案の段階では「この憲法施行の際、現に華族その他の貴族たる者については、その地位は、その生存中に限り、これを認める。但し、将来華族その他の貴族たることにより、いかなる政治的権力も有しない」(補則第97条)と、現存する華族一代の間はその栄爵を認める形になっていました。創設から廃止までの間に存在した華族の総数は1011家です。華族、即ち貴族はもとより、皇族も多く財産を失いました。そこで、生活のためにこういう不動産は売られてしまったんです。各地にプリンスホテルというのがありますね。あれは、当初は皇族の土地だったものです。プリンスホテルのプリンスという命名は、その由来です。

谷水 では、市川侯爵も。

黄村 ご同類でしょう。ですから、この廃園には、何かルサンチマンのようなものを感じます。

海野 ルサンチマン。

黄村 怨嗟ですね。恨みです。最近じゃガーデンングなんて類の、庭遊びが流行っているようですが、庭といるのは私にいわせれば人工の森なんです。森というのは、魔物の住むところですよ。とてもじゃないが人間が遊べるようなところじゃナイ。そこには精霊が息を潜めて隠れている。それがこのような廃墟になつていふことは、本来ならば鎮められねばならないスピリチュアルな何者かが、悪霊となつて渦巻いているというわけです。そうしてここに、いつてみれば人間の敗残者が、人生の負け軍(いくさ)の落ち武者が集められて、ますますその怨嗟は強くなつていふようです。

海野 あの、

黄村 どうかしましたか。

海野 この正門のところで、

谷水 ああ、ボクも観ました。

黄村 何を。

海野 酒屋さんが、真正面にあつたんですけど。

谷水 いや、ボクの観たのは、刑事らしい男と制服警官のことだけけど。

黄村 お二人がご覧になったのを、順を追ってご説明いたします。

谷水 なるべく、簡潔に。

黄村 どういうことですか。

谷水 いえ、他意はアリマセン。

黄村 そうですか、では簡潔に。海野さんの観た酒屋というのは、その名の通り、酒類販売店のことですね。

海野 そうです。

黄村 あるんです。正門を出た、その正面に、酒屋さんが。

海野 どうしてなんですか。何か意味が。

黄村 意味なんかありません。偶然です。

海野 でも、アルコール依存症の治療施設の真ん前に、

黄村 しょうがありません。偶然なんですから。

海野 大丈夫なんですか。

黄村 海野さんのいわんとすることはワカリマス。ここで、やつのことで、治療を終えたひとが、魔が差

して飛び込むじゃナイかと、そう思っているんでしょう。

海野 そうです。

黄村 そういう方もいるかも知れません。

海野 そうなったら、

黄村 元の木阿弥です。

海野 そういった事は、

黄村 さあ、あったかも知れません。

海野 そんな無責任な。

黄村 この施設がですか、それとも酒屋さん。

海野 だって、何も、正門の正面に。

黄村 不思議ですね。しかし、在るものはしょうがナイ。

海野 それって、何か、試されてるんでしょうか。というか、

黄村 試すためにわざと店を開いているとでも。

海野 ええ。

黄村 さあね。私は存じません。さて、谷水さんの観たものは、

谷水 何かあったんですか。患者が暴れたとか。

黄村 いいえ、事故があったんです。

谷水 事故。

黄村 とは、まだ断定されていません。(とある方向を観て) あそこに円筒状の建物がありますね。

谷水 (そっちを観て) はい。

黄村 あの三階が、院長室です。あその広い窓から、院長が落下したんです。

谷水 落下。落ちたんですか。

黄村 そうです。そういうときは、警察は三つの可能性で動きます。

谷水 事故、自殺、他殺ですか。

黄村 その通り。

谷水 そりゃあ、いつの事です。

黄村 三週間ばかり前です。現場検証は終わりましたが、目下調査中だそうです。

海野 それ、ご存知だったんですか。

黄村 さあ、ね。さてと、水族館にでも、行きましようか。

谷水 (庭を見渡して) さすがに、これだけ荒れ果てた庭だと、患者さんも殆どいませんね。

黄村 そうですね。

海野 あの少女は。

海野の視線の方向に、円筒状の建物に向かって、椅子に座ってスケッチをしている少女の姿がある。

黄村 あのこは、「お絵描きさん」と呼ばれています。

海野 まだ、かなり若いじゃないですか。

黄村 これだから素人は、というか、無教養は困る。

谷水 無教養。

黄村 あなたたちは、アルコール依存症について、まったくの誤解をしている。というか、まったく知識がありません。アルコール依存症を、例えば長くアルコールを連用し

た者が陥る疾病だと考えているんじゃないやありませんか。

谷水 まあ、そのごとく、ですが。

海野 そうじゃ、ナイんですね。

黄村 まったくチガイます。

海野 じゃあ、

黄村 アルコール依存症というのは、

谷水 いえ、いいです。今度、勉強してきますから。

黄村 谷水くん、そういう態度は良くない。どうせ、私の長々とした退屈なご高説とかが聞きたくないか、あるいは、私がこれから述べようとしているアルコール依存症についての知識は、付け焼き刃、にわか仕込みの一夜漬けだと、そう、思っているんでしょう。どうなんですか。

谷水 いえ、けして、そんな。

黄村 (気にせず、語り始める) 大量の飲酒や常習飲酒者がアルコール依存者であるとは限りません。確かに常習飲酒者が圧倒的に多いことは事実ですが、極めて稀にしか飲酒しない者でも、ひとたび飲酒すると突然に意識障害が現われて、急激な興奮、攻撃的態度となり、周囲の状況の認識を欠く状態となり者もおります。飲酒量によってアルコール依存症を簡単に診断することも出来ません。アルコールに対する受容量は個体差が大きいのです。大酒飲みでも、身体的にも精神的にも社会的にも何ら障害を示さない者もあります。アルコール依存症という概念は極めて曖昧で、専門家のあいだでも明確な定義がなされていません。

海野 へーえ、そうなんですか。

谷水 それはボクも、知りませんでした。

黄村 アルコール依存は精神的依存と身体的依存に区別されています。精神的依存は、飲酒を中断すると精神的に不快なイライラ感や欲求不満、不眠などの障害を認め、身体的依存は、断酒することによっておこってくる幻覚、妄想、ふるえ、けいれんなど、せん妄状態と呼ばれるような身体障害、いわゆる禁断症状を認めます。私などは、身体的には、アルコール性肝炎すなわち脂肪肝でしょうけどね。しかし、人格レベル低下というのには至っておりません。

谷水 人格、はあ、まあ、そうですね。

黄村 なんですか、その、まあそうだというのは。

谷水 いえいえ、べつに。

黄村 あなた方も、たとえば、ストレス発散のために飲むことが週に一回くらいはあるでしょう。

谷水 ええ、まあ。

黄村 アルコールでストレスを解消する。これが、アルコール依存症の第一歩です。これが積み重なっていくと、たとえ、週に一度でも、充分、アルコール依存になります。

谷水 えっ、そうなんですか。そりゃ、怖いな。

海野 それで、あの、少女の場合は何なのですか。まだ、二十歳にもなっていないみたいですけど。

黄村 彼女は中学のとき、イジメにあったのです。それで、まず、ドラッグに手を出した。しかし、

これは両親が取り上げました。そこで、手短にアルコールに手を付けたんです。倫理道徳感減退、自己中心的、虚言、無責任、無関心、無頓着、感情の爆発、意

欲低下、注意力低下、記憶障害、思考力低下、意識混濁、幻視、精神不安、興奮、不眠、自傷。

海野 可哀相。

黄村 女性の場合、アルコール依存になる早さは、男性の2倍から3倍。おそらく体重の比率ではナイかといわれていますが、確証はありません。依存する割合も男性より多いのです。これもまた、世間の常識とは違うところでしょう。イギリスの女性ミステリ作家の8割はアルコール依存症です。これは私の専門分野ですからね。しかし、幸いにも、彼女には、絵を描く才能がありました。絵を描いているときには、アルコールのことをは忘れることが出来る。そこで、ああやって、スケッチをして過ごしています。ま、どういうワケかこの廃園がお気に入り、この辺りばかりを描いてますが。

谷水 何だか、あれですね。

海野 何なの、あれって。

谷水 いや、こんなこといっちゃいけません、絵といえば、この廃園と、彼女とが、妙にピツタリ絵になっているようです。

海野 そういいうい方は、ちよつとひどいわ。

黄村 まあまあ、さて、水族館詣でに参りましょう。ウイスキーはこの噴水に隠して。個人が趣味で建造した物としては、ヒジョウに興味ある水族館です。

黄村先生、アルバムを閉じて、それを小脇にはさむと、スタスタといってしまふ。谷水がグズグズしているの、

海野 谷水くん、なにしてんのよ。

谷水 いやあ、なんだかイヤな予感がする。

海野 何よ、ナンなの、イヤな予感で。

谷水 何かありそうなの。

海野 もう、何があったって、いいじゃない。黄村先生なんだから、何かあるのはアタリマエよ。

谷水 そうか、そりゃ、そうだな。

海野 早く、ほら。

谷水・海野、黄村先生を追うように去る。

いれかわりに、白衣の医師らしき中年の女性が、ポケットに手を入れて庭園に入ってきた。酒に関係がある場所なので、酒井典子という名前にしておこう。酒井は、「お絵描きさん」に近づく。



別にCMが入るワケではナイが、便宜上、ここから始める。

酒井は、お絵描きさんのスケッチを覗き込むように後ろに立って、腰を屈めた。

酒井 (半ば揶揄するような口調で) 何を描いているの。

お絵描きさん 建物のスケッチです。

酒井 (絵を見て) ふーんっ、ほおーっ。うん、お上手ね。

お絵描きさん いえ、ただのスケッチです。

酒井 これ、どういう意味。

お絵描きさん 何がですか。

酒井 あなたの描いてるのは、(指差して) あの建物よね。

お絵描きさん ええ。

酒井 これは。(スケッチブックを指さす)

お絵描きさん 人です。

酒井 ええ、たぶんそうだと思うけど、この人は建物の外にいるわね。

お絵描きさん そうですが。

酒井 宙に浮いているようにもみえるけど、そうではナイ。

お絵描きさん そうじゃありません。

酒井 つまり、落下、落ちていつているのね。

お絵描きさん はい。

酒井 何処からかしら。

お絵描きさん たぶん、

酒井 たぶん、んっ、

お絵描きさん この三階の窓から。

酒井 そうですね、そうとしか考えられません。空から降ってきているのでナイとしたりだけど。

お絵描きさん 窓からだと思います。

酒井 この人は、この三階の窓から落ちたんですね。

お絵描きさん よく、ワカリマセンけど。

酒井 で、この窓にも何かがみえる。何かがいる。

お絵描きさん います。

酒井 すると、この落ちていている人と、窓の中にみえる何かの関係は、まさか、この窓の中の何かが、この落

下している人を突き落としたんですか。

お絵描きさん 何を訊かれていたのか、よくワカリマセン。

酒井 あなた、このあいだの事故の噂を聞きましたね。

お絵描きさん えっ、

酒井 この院長が、あの三階の院長室の窓から落ちた事故です。

お絵描きさん 聞きました。

酒井 噂を聞いて、想像で描いているんですね。そうでしょ。

お絵描きさん (一瞬答えを躊躇うが、きつぱりと) 観たとおり、描いているんです。

酒井 そうすると、この落ちてる人が院長ということなのか。

お絵描きさん 観たとおり描いただけです。

酒井 窓の何かは、何ですか。

お絵描きさん よく、ワカリマセン。何か大きなモノでした。

酒井 大きなモノ。

お絵描きさん (またしばらく黙した後) 思い出せません。

酒井 いいですか、あなたの現在の主な症状というのは、幻視、幻覚、幻聴、おまけに虚言です。アルコールの濫用による精神障害というヤツです。だから、この絵だって、本当に観たのか妄想なのか、そのところはワカリマセン、まず、私の医者としての所見からいって、あなたはこんなものは観てはいません。そうでしょ。

お絵描きさん 私、観てましたから。

酒井 では、この大きな何かは何ですか。

お絵描きさん (黙ってしまう)

酒井 ナンなの。(と、いやに優しく)

お絵描きさん 暗い影のような、  
酒井 でしょ。(ほら、その通りとでもいったふう) そういう暗い影ね。それは、単なるカーテンの陰影だったかも知れません。あるいは、木々の影だったかも。いまのあなたには、影一つですら、いろんなものにみえるんです。

お絵描きさん そうなんですか。

酒井 この絵は、警察の方にみせましたか。

お絵描きさん いいえ。

酒井 警察の方に自分が観たその、何か、の、ことを話しましたか。

お絵描きさん いいえ。

酒井 いつでも相手にはしてくれません。あなたは病気なんですから、ね。

お絵描きさん ワカッテいます。

酒井 他にはどんな絵を描いているのかな。(と、スケッチブックを取り上げる)

お絵描きさん あっ、やめて、

酒井 (パラパラと観て) あの円筒の建物が多いわね。

お絵描きさん あの建物が好きなんです。

酒井 あら、そうなの。

お絵描きさん スケッチをしては、いけませんか。

酒井 いえ、そんなことはいってません。

お絵描きさん あの建物を描いてはいけませんか。

酒井 そんなことはいってナイ。(と、口調が厳しい)

お絵描きさん はい。(萎縮した)

酒井 アルコールさへ口にしなければ、何をやってもいいんです。ただ、

お絵描きさん ただ、

酒井 ほんとうのことと、妄想とが、ハッキリ区別出来るようになるまでは、退院は許可出来ませんよ。ワ

カッテますね。(まるで脅しだ)

お絵描きさん はい。(と、屈伏だ)

酒井 他に何か描きたいものはナイの。(急に懐柔して) 他にいろんなものがあるでしょ。

お絵描きさん この庭が好きなんです。

酒井 こんな庭が。

お絵描きさん はい。

酒井 どうして。

お絵描きさん それは、(と、刹那、考えるが) よくワカリマセン。

酒井 ねえ、あなた、どうして、この療養院に、こんな荒れ果てた廃園が残したままにしてあるのか知って

いますか。

お絵描きさん いいえ。

酒井 それはね、これは、アルコール依存症の患者さんのココロなの。この廃園が蝕まれた心身そのものな

んです。患者さんは、この廃園を観ることによって、自分自身のココロを観るんです。どれだけ、自分

が壊れてしまっているか、納得するんです。そうした上で、こんな廃園になってはイケナイと、固い決

意をもって治療に臨むんです。そのために、この廃園は、こんなふうに残してあるんです。

お絵描きさん そうなんですか。

酒井 それを、あなたのようにここが好きだなんていうようでは、まったく、この庭の存在理由というもの

がありません。

お絵描きさん そうですね。(うなだれた)

酒井 もっと、美しいものを描かなくては、ね。

お絵描きさん (不承不承) はい。

酒井 (お絵描きさんの肩を両手で軽く叩く) 治りませんよ。

お絵描きさん (頷いただけ)

酒井 絵を描く他に、たまには読書などしてみたらどうですか。

お絵描きさん 読書。

酒井 読書には興味はありませんか。

お絵描きさん 太宰治なら、読んでます。

酒井 (眉間に皺を寄せて) 太宰治、それは、あまり勧められません。

お絵描きさん 太宰治ダメですか。

酒井 彼自身アルコール依存症ですからねえ。書くものはデカダン、頹廢、放蕩無頼ですからねえ。そうだ、

志賀直哉なんかをお読みなさい。襟を正して。

お絵描きさん (ハッキリと) 志賀直哉はキライです。

酒井 どうしてですか。

お絵描きさん あの作家の小説は斬っても血が出ないみたいで。

酒井 血が、(少々、黙するが) そうですか。まあ、好き好きですから、ね。じゃあ。

酒井は、去っていく。

患者らしき男が現れた。

現れた患者らしき男は、木刀を一振り、ランニングシャツに短パンという出で立ちだ。木刀を持つているからといって、暴れるワケではナイ。

ゆっくりと素振りを始めた。如何にも武道派という顔つきだが、肥満して、肉はだぶついている。

別の方角から、二人、壮年の患者らしき（もちろん患者なのだが）が現れて、噴水に腰をおろした。

高木 ねえ、ねえ杉田さん。そんなに暗くなつてると、治るものも治りませんよ。

杉田 いつになったら退院できるのかな。

高木 治つたら、出してもらえらんじやないですか。それにここは病院というより療養院なんですから、サナトリウムだと思って、気楽にしていればいいですよ。

杉田 高木さんはこのあいだ入られたばかりだから、そんな悠長なことがいえるんですよ。私はもう二カ月近くいるんですからね。まあ、ここを出たところで、天国が待ってるわけじやないですが。つまりですね、家の方が退院にうんといつてくれないわけですよ。私をこんなところに入れて、厄介祓いを決め込んでるんですから。

高木 だって、杉田さん、ここ出たら、また飲むんですよ、どうせ。

杉田 いや、今度こそ、キツパリやめるつもりですけど。

高木 いつもそうなんですよ。いつも、今度こそ、今度こそといい聞かして、結局はまた飲んでしまうんだから。

杉田 そうかも知れませんがね。

高木 だって、私、そうなんですもの。こういうところに何度来たことやら。まあ、いつも三月ばかり頑張ってますね、よし、いざと退院してですね、それで、どういうワケか、その足がですね、居酒屋に向いてしまう。つまり退院祝いに飲んでしまつて元の木阿彌というヤツですね。

杉田 いや、それは、わかりますが。

高木 杉田さん、ご職業は。あつ、そういうことを訊くのはここでは御法度でしたね。

杉田 いいですよ。それくらい。私の杉田という名前だって、あなたの高木という名前だって、便宜上つけられているだけです。私も本名はいえませんが、職業くらいなら構わないでしょう。私は庭師です。

高木 庭師、おや、そうですか。じゃあ、この庭も気になるでしょう。

杉田 この庭ですか、ええ、そりやあ気になりますよ。気になるところか、私はね、院長先生に申し上げたんですよ。この庭を何とかしてもらえないかって。この庭は死んでいる。でも蘇生させることは出来るから、やらせてもらえないかって。

高木 死んでますか、この庭。

杉田 ええ。

高木 やっぱり。

杉田 水が枯れているんです。水さえ供給してやれば、ここは生き返る。しかも、私のみたところでは、水はパイプで供給可能なんです。この地下を水道が走っているはずですよ。バルブを開ければいいんです。噴水だってそれで流れるはずですよ。

高木 そういえば、この院長、お亡くなりになったんですってね。私は最近入ったもんだから、あまり事情は知りませんが、事故だったとか。あの三階の窓から落っこちたとか。

杉田 えーと、便宜上の、高木さん。

高木 ええ。

杉田 あなた、ご職業は。

高木 そうです、ね。答えちゃうか。私は俳優です。

杉田 (妙に驚いて) 俳優。(というのも、高木という人物がどうみても俳優というメリハリの効いた人種にはみえなかったからなのだが)

高木 はい。(と、得意の新劇など、ちよいと披露してみせる)・・・勇气の根源はシェリー酒にありだ。武芸だって酒がなければ無芸と同じだ。学問だってそのままじゃ悪魔が隠している金の山と同じだ。酒がそいつを掘り出して活用するまではな。・・・どうです、シェークスピアですよ。しかも、『ヘンリー四世 第二部』4幕3場のフォールスタッフの独白。私の好きなところ。なにしろ、酒ですから。

杉田 はーあ。(やや、皮肉な感心) 勇气の根源が酒ですか。

高木 自慢じゃないですが、私はそんなひどくないですよ。

杉田 芝居がですか。

高木 違いますよ、症状ですよ。私は何ですか、あのシンセン妄想というのものないんです。ゲジゲジとか虫とかが身体をはいずってくる妄想、あれ、ないですよ。私はね、ただ酒癖が悪いんですよ。ちっともアル中なんかじゃないんです。

杉田 どういうふうに悪いんです。

高木 飲んじゃうと酩酊して、そこいらに小便撒き散らすらしいんです。二階の窓からやったり、台所の流しにしているうちはまだいいんですが、ああ、この流しにするってのがまた面白いです。やれコップだ、やれ茶碗だ。湯飲みや皿に狙いを定めて、ジョジョンてやるんです。命中した時はスカッとしますね。いや、あのね、それが、ひどい時には押入れの中でやったりするらしいんです。こないだなんか、女房の顔にシャー。顔面シャワーですよ。それからね、朝、気がつくとき全身びしょ濡れなんです。どうも酔っぱらって服着たまま、水風呂に入ったらしいんです。でもまったく記憶にないから大丈夫ですよ。

杉田 立派なアル中ですよ、それ。アルコール依存症。

高木 そうですかね。

杉田 ひどくないとすると、離脱症状もあまりなかったわけですね。

高木 何です、それ。

杉田 禁断症状ですよ。

高木 ええ、おかげさまで。私なんか一月もここにいれば完治しますよ、きっと。

杉田 私も最初はそう思っていました。

高木 ダメでしたか。

杉田 しかし、イヤな庭だな。水のバルブを開けるだけでいいんですよ。それだけで、きつとこの庭は生き返るんです。庭師だからいうんじゃないですが、私はこの庭を観ていると、いてもたってもいられないんです。いまの私を観ているようで。

高木 ナンだか、それがここの治療方針らしいですけどね。

杉田 高木さん、恥をいうようですがね。

高木 なんですか。

杉田 実はこちらのがね。

高木 奥さんですか。

杉田 ええ、女房です。

高木 どうされたんですか。まさか、男を、

杉田 そんなことが出来るご面相じゃありませんよ。

高木 じゃあ、

杉田 週に何日か、手弁当というのを、持って来るんです。

高木 えっ、手弁当。そりゃあ、愛情じゃありませんか。

杉田 今日も、私、それをここに持ってます。(持ってたらしい)

高木 いやあ、愛情ですよ。

杉田 この弁当、愛情だと思いますか。

高木 入院している夫の為に弁当を作ってくる妻なんて、いませんよ。

杉田 こいつはお笑いだ。私は今まで、これは恥だと思って隠してきました。よござ

んしよ、その妻の愛情をこめた弁当をおみせいたしましたしよ。

杉田 (弁当を包みから取り出して、蓋を開け、噴水の中に傾けた) これですよ。これが愛情ですか。これは女房の復讐ですよ。

杉田の手にしている弁当箱からは砂がこぼれ落ちる。

杉田 私も最初に弁当を受け取った時は、愛情というヤツかと思いましたが。許してくれるんだなと涙まで流しました。ところが、あけてみると、これです。中身は砂です。驚きましたよ。週に何度か、私にこの砂の弁当を届けて、女房のヤツ、私に復讐してらんですよ。お前なんか砂を食えと、そういつてらんですよ。

高木 砂を噛むとは、いったものだな。

杉田 男が嘘をつかなくなり、女が欲さへ棄てる事が出来れば、酒なんて要りません。

高木 そういうもんですか。私は反対かと思いましたが。

杉田 いいえ、あのね、私のこのご面相でいうんだから、笑わないで下さいよ。

高木 笑いませんよ。

杉田 男というものは、恋をすると嘘をつきます。女は恋をすると欲に狂います。

高木 いや、お見事なご意見で。

杉田 何だか、誰だかの本で読んだことをいってるだけですよ。

高木 男の嘘は、私も男ですから、よくワカリマスが、女の欲というのは何ですか。

杉田 独占欲に決まってるじゃありませんか。

高木 はあくあ、なるほど。(大いに感服する)

杉田 せめて、この庭いじらせてもらいたいな。水のパイプ開けたいです。高木さん、

地球表面の71%が水で覆われているって御存知ですか。

高木 へーえ、そうですか。

杉田 砂漠にだって15%の水分が含まれてるんですよ。あの樹木は80%、野菜なら95%、我々人間は、なんと魚と同じ70%の水を含んでいるんですよ。

高木 へーえ、そうですか。

杉田 なのに、この庭園には水がない。だから、ここは死んでいる。水と石と樹木、ここはおそらく理想的な庭園だったのに違いないんです。

黄村先生一行が戻って来た。

素振りをしている男の前を通りすぎる。

谷水 いろんなひとがいますね。

黄村 偽武道家。

海野 (たしなめて) 先生。

黄村 格好ばかり。

谷水 (同様に) 聞こえますよ。

黄村 聞こえるようにいつているんですから、聞こえます。

谷水・海野の心配通り、男は素振りをやめて、三人に近づいて来た。

男 聞き捨てならんな。

黄村 この方は、ここでは「武道家」と称されています。宮本武蔵を尊敬されているとのことです。

武道家 その通り。

谷水 それが、どうしてアルコール依存なんかに。

海野 谷水くん、余計なこと、いわない。

谷水 あっ、しまった。

武道家 某(それがし)はアル中なんぞではナイ。

黄村 アルコール依存症の患者のほぼ100%は、自分のことをアルコール依存とは認めません。それが、一つの症状といわれるほどです。

武道家 失礼ながら、貴公は、宮本武蔵師匠の『独行道(どっこうどう)』を読んだことがおありかな。

黄村 専門分野が違います。

武道家 では、ひとつ、ご教授いたそう。

黄村 それは、ありがたいことです。

武道家 一、世々の道に背くことなし。

黄村 せぜのみちときましたか。道徳のことですね。では、私の場合をいうならば、世々の道は知らず。教えられても照れくさくて実行出来ぬ。だいたい、ひとを斬り殺してた者に道徳もへチマもありはしません。

武道家 むっ、

谷水 先生。

黄村 どうぞ、お続けられるのなら。

武道家 二、万ず依怙地な心なし。

黄村 依怙地、意地を張ることですね。万ず、依怙地の心あり。生意気な若者を毛嫌いする事はなはだし。内気な、勉強家の、二、三の学生だけにはにこにこする。

武道家 三、身を楽にたくまず。

黄村 楽にしないか。私は身の安楽ばかりを考える。

武道家 四、一生の間、欲心なし。

黄村 欲の深き事、常軌を逸したるところあり。玩具屋の前に立ちて、あれはいや、これもいや、それでは何がいいのだと問われて、空のお月さまを指さす子供と似たるころあり。大欲は無欲にさも似たり。

武道家 五、我が事において後悔せず。

黄村 我、ことごとく、後悔する。きつと後悔すると知りながら、ふらりと踏み込んで、さらに大いに後悔する。後悔の味も、やめられぬものとみえたり。

武道家 六、善悪につき他を妬まず。

黄村 妬むにはあらねど、成功したる者の悪口をいう傾向あり。

武道家 七、何の道にも別れを悲しまず。

黄村 サヨナラだけが人生だ。これを悲しまずして、何を悲しむ。

武道家 八、自他ともに恨みかさつ心なし。

黄村 他人に対してはそれほどではなし。自らを恨むこと、我より甚だしきはあるまじ。

武道家 九、恋慕の思いなし。

黄村 起きてみつ寝てみつ胸中に恋慕の情絶えることなし。されども、すべて淡き空想に終わるなり。

武道家 十、物事に好きこのみなし。

黄村 美酒を好む。濁酒も好む。

武道家 十一、居宅に望みなし。

黄村 かつての借家住まいに比べれば、いまの3LDKは城の如し。

武道家 十二、身一つに美食を好まず。

黄村 美食を好むところにはあらねど、さて、今晚のおかずは、夜食はと、空腹の訪れることの嬉しさは、生きることの享樂なり。

武道家 十三、古き道具を所持せず。

黄村 それは、同じ。ただし、すべて売却して、金品に換えるだけのこと。

武道家 十四、我が身にとり物を忌むことなし。

黄村 忌むもの多し。犬、蛇、毛虫。このごろの蠅のうるささ。嘘つきは最も嫌いななり。

武道家 神仏を尊ぶが神仏を拝まず。

黄村 苦しいときの神頼み。それ以外に神仏の価値を認めず。と、まあ、聞いているほうも飽きてきたところでしょう。では、この辺で。

武道家 待たれよ。貴公は宮本武蔵をどう思われる。

黄村 『バガボンド』の作者に訊け。

武道家 ナニツ。

黄村 いや、それは冗談として、そうですね、生涯六十回も試合をして負けなかったんですから、よほど逃げるのが上手かったひとでしょうか。武道家 それも聞き捨てナランな。

黄村 武蔵は相手が三人のときは、勝てるみこみはナイから逃げよと、どこかに書いてますよ。これが、四人以上になれば、もう一対一同様。



武道家 四人に前後左右を囲まれたら、貴公なら、誰から斬る。

黄村 イチバン後ろでしようかな。で、逃げる。

武道家 やっぱり逃げるか。

黄村 佐々木小次郎になら一言（いちごん）。

武道家 おう、訊こう。

黄村 時代劇で佐々木小次郎の役を演ずるときに、物干し竿、即ちあの背刀の柄が右にある者あり、柄は左肩に出ないといけない。これだけ。

武道家 それは巖流に対する一言ではナイではないか。貴公は武道を何と心得る。

黄村 さあね、太宰の文学をして、くあんな悩みは、乾布摩擦でもすればなくなるく評したのは、三島由紀夫だが、その三島の作品はね、ありやきみ、太宰の影響を大きく受けていますよ。三島はボデビルや空手をやって肉体を鍛練したらしいが、それなら作家ではなくて、役者にもなれば良かったんです。文学も武道も、どつちにせよ、命懸けです。

武道家 うーむ、よくワカランが、

黄村 いつてるこつちだつて、よくワカランのですが、ね。さて、余興はほんとに終了にしましょう。

武道家 うーん（と考え込んでいる）

黄村 谷水くん、海野くん、今日はもう充分でしょう。連載の原稿は〆切を遵守しますから、取りにいらつしやい。

海野 黄村先生、一つ質問が。

黄村 何ですか。

海野 ずっと小脇にされているアルバムは、何なのです。

黄村 ああ、これね、これは、大事なもの。

海野 というと、

谷水 海野くん、無駄むだ。それ以上、黄村先生はお答えにならないよ。じゃあ、今日はこれで失礼します。

黄村 はい、おつかれさま。

海野 （まだ怪訝な顔をして）あの、

黄村 まだ、ナニか。

海野 黄村先生が、ここに入られたほんとうの理由は何です。

黄村 （瞬時、黙して、海野の顔を観ているが）謎、ですな。

海野 （諦めた様子）じゃあ、お気をつけて。

谷水・海野、去っていく。

杉田 バルブだよ。バルブが開けたいんだ。（去っていく）

谷水 杉田さん。（追うように去る）

武道家もウンウンいつつ消える。

つまり、庭には、黄村とお絵描きさんしか残っていない。

次第に、夕暮れがやって来る。

黄村はお絵描きさんにゆっくり、近づいていく。

黄村 今日は、どんな絵を描きましたか。

お絵描きさん (黄村を観て) えっ。

黄村 ずっと、ここで、絵をお描きでしょ。

お絵描きさん はい。

黄村 それ、(とスケッチブックを示して) みせて頂いて、よろしいですか。

お絵描きさん えっ、

黄村 いえいえ、私は絵には素人です。論評しようというわけではありません。もちろん、

咎めようというのでもありません。

お絵描きさん 咎めるって、どうしてそれを。

黄村 あなたの顔に描いてあります。誰かに、絵のことで叱られましたね。何故叱られたのかも想像でいうことが出来ます。たぶん、あなたは、あの円筒状の建物をお描きになつていたからでしょう。

お絵描きさん そんなことまで。

黄村 人間、長生きはするものです。し過ぎるとボケますが。私程度がちょうどいい。肉体にはガタがきますが、頭脳というのは、どういうワケか、若い頃より活動します。

どうでしょう。絵をおみせ頂けませんか。

お絵描きさん (スケッチブックを渡す)

黄村 (ふんふん、などと頷きながら、観ている)

お絵描きさん ひとが、落ちたんです。

黄村 そうですね。院長が、あの建物の三階から落下しました。観てらしたんですね。

お絵描きさん はい。

黄村 それを絵にお描きになった。

お絵描きさん そうです。

黄村 (話題を逸らす) アルコール依存の話をししましょう。アルコールは体内に入ると、ある分解酵素によって、分解排出されます。ところが、日本人は、この酵素を持つているひとは、50%、つまり二人に一人なんです。ですから、幸か不幸か、アルコール依存症というのは、諸外国に比べると少ないんです。しかし、少ないから、逆に目立ってしまうんですね。

お絵描きさん そうなんですか。

黄村 あなたの好きなお酒は、何ですか。

お絵描きさん えっ、

黄村 私は医者じゃありません、お仲間です。私は、何だって飲みます。しかし、日本酒の吟醸というのは、ちょっと重い。

お絵描きさん ええ、大吟醸なんか、多く飲めません。

黄村 ですよ。

お絵描きさん 私は焼酎を。

黄村 本格的ですね。黒霧島なんてのを飲ってみましたか。

お絵描きさん いいえ、ナンでも。

黄村 黒霧島は、以前は貴重な銘柄でした。年に二度しか出荷しなかったからです。いまじゃ、コンビニでも売ってますがね。

お絵描きさん お詳しいんですね。

黄村 アメリカのスタンドバーなどに行くと、籠に生卵が山のように積まれて置かれています。あちらのほうのアルコール依存者は、ジンをグラスに入れて、その生卵を割って落とし、グイッとやるんです。食事の代わりです。

お絵描きさん 生卵を。

黄村 栄養を摂るためです。貴重な蛋白源です。日本人の場合は、アルコール依存者が好んで飲むのは焼酎です。もちろん、いろいろ飲みはしますが、安くつくからです。いまでは焼酎も高級品になりましたが。35度の焼酎を生(き)でグイッと飲む。おっと、いけませんね、飲みたくなってきましたね。違う話にしましょう。

お絵描きさん 酒井先生は、読書でもしなさいと、おっしゃいました。

黄村 読書、イイですね。傍らにショットグラスを置いて、いや、イカンですな。

お絵描きさん 志賀直哉を読めと。

黄村 志賀直哉、小説の神様と呼ばれているひとですね。

お絵描きさん でも、私は好きではありません。

黄村 小説でも絵画でも、神様になっちゃイケマセン。で、あなたは、どんな。

お絵描きさん 太宰治を、少し。

黄村 太宰治、よきかな。

お絵描きさん 好きなんです。

黄村 誰だって、あなたくらい年の頃の女性は、太宰治が好きでしょう。

お絵描きさん ダメでしょうか。

黄村 いいえ、少しも。太宰治の小説の多くには、太宰治が登場します。そうして、こんなつまらない小説なんか書くなど、作者を論評するようにいうんです。その葛藤が、太宰文学というものでしょう。

お絵描きさん 難しいですね。

黄村 おや、失礼。どうも、職業柄。

お絵描きさん どんなお仕事をつて、訊くのは、規則違反なんですよね、ここでは。

黄村 そうらしいですね。本名も、素性にも触れてはイケナイ。方針ですね、ここのお絵描きさん。

お絵描きさん 酒井先生は、太宰はアルコール依存症だっておっしゃってました。

黄村 かも知れませんが。よく飲んだようですから。太宰の書いたものを読むと、あのひとは、一升瓶に酒が残って台所に置いてあるのをとても嫌って、ともかくキレイさっぱり飲みきってしまったわかないと安心出来ないタイプだったようですね。

お絵描きさん それって、どういうタイプのことなんでしょう。

黄村 酒を残すというのは、酒に対しての傲慢無礼だと思っていたんでしょう。

お絵描きさん 面白いタイプですね。

黄村 坂口安吾は、エッセイでいっています。自分は酒など美味いと思って飲んだことな

ど一度もナイ。ただ、酔って、酔っぱらって眠りたいから飲むんだ、と。

お絵描きさん あの、

黄村 私ですか。私は、酔禪です。

お絵描きさん スイゼン。

黄村 そうです。飲むことは禅宗における座禪と同じです。酔って瞑想するのです。しかし、ときどき、これが迷い走るの迷走になるのです。

お絵描きさん 私は、眠るときにいつも怖い思いをします。

黄村 どんな。

お絵描きさん 今夜、このまま死ぬんじゃないだろうか。このまま死んでしまうんじゃないだろうか。それは、とても、怖いです。

黄村 で、台所に走る。

お絵描きさん はい、最初は。

黄村 しかし、台所のアルコールはある日消えた。

お絵描きさん ベッドの下や、本棚の裏に隠したのを飲みます。

黄村 それも、捜し出されて棄てられた。

お絵描きさん こっそり抜け出して、自動販売機の前で飲みます。

黄村 抜け出せないように鍵がかけられた。

お絵描きさん プチ家出をしました。

黄村 警察にすぐに保護される。

お絵描きさん みんな、おっしゃる通りです。

黄村 私くらの年齢になると、今日死ぬんじゃないだろうか、今夜がそうかも知れないとか、アト何年生きられるんだろうかとか、そんなふうには思わないんです。

お絵描きさん 思わないんですか。

黄村 もう、いつ死んでもイイんです。今日が今夜だろうが、いますぐだろうが。

お絵描きさん それって、悟りですか。

黄村 冗談じゃナイ。ただの諦めです。

お絵描きさん 諦め。ただの。

黄村 どのみち、生きるというのは、one way ticket です。片道切符です。そういう汽車に乗ったんですから、しようがありません。途中下車もありませんからね。

お絵描きさん one way ticket.

黄村 く去年（こぞ）盛りあらば、今年の花なかるべきを知るべし、世阿弥というひとが書いた『花伝書』という能の修業の本に出てきます。

お絵描きさん どういう意味なんですか。

黄村 簡単にいってしまえば、世の中には巡り合わせというものがあるから、ついでに時と、ついていない時がある。そういうことです。

お絵描きさん く去年（こぞ）盛りあらば、今年の花なかるべきを知るべし。

黄村 もう一つ、教養をお聞かせしましょうか。

お絵描きさん はい、幾つでも。

黄村 く楽しみあらば、しばらく須らく楽しむべし、時なる哉、失うべからず、これは中国唐の時代の詩人、隠士寒山のコトバです。簡単にいえば、楽しみがある時は、と

もかくせいぜい楽しんだほうがいい。それはまたとないチャンスだからとり逃がしてはならない、ということですよ。

お絵描きさん いろんな本をお読みなんですね。

黄村 いえいえ、殆どがハッターです。

お絵描きさん 私、どんな本を読んだらいいでしょうか。

黄村 (キツパリと) トーマス・マンの『魔の山』。

お絵描きさん 『魔の山』、それは、どんな本なんですか。

黄村 ここでよく似た場所、結核療養所の話です。

お絵描きさん わかりました。おぼえておきます。

黄村 さて、あなたの描かれた、この落ちる院長の絵ですが、

お絵描きさん 観たとおりに描いたんです。

黄村 それは、ワカッテいます。あれは事故ではナイということもワカッテいます。

お絵描きさん えっ、事故ではナイんですか。

黄村 はい。このアルバムには、あの事件以後と以前の、院長室の写真が納められています。問題は、あの広い窓の下の部分、四角い窓の底辺の部分、あの建物の外壁は煉瓦です。簡単にキズが残ります。その写真を拡大したのがこれです。(アルバムを開いてみせる) ここに、少々判りづらいですが、ひとの爪痕があります。つまり、落つこちた院長は、いちど、あの外壁に手をかけて掴まったんです。ですから飛び下り自殺ではアリマセン。

お絵描きさん でも、事故かも。

黄村 事故でナイことは、あなたのスケッチからもワカリマス。

お絵描きさん えっ、

黄村 ここに、大きな影がありますね。

お絵描きさん はい。酒井先生は、幻視だとおっしゃってました。

黄村 たしかに、そうかも知れません。しかし、私の解釈は違うんです。

お絵描きさん じゃあ、この、大きな影は何なのですか。私、観たんです。

黄村 その大きな影は、山椒魚です。

お絵描きさん 山椒魚っ、

黄村 そうです。身の丈三丈のオオサンショウウオです。

あの廃園の噴水に、黄村先生と並んで腰をおろしているのは、最初に登場したかき水屋の親父だが、きちんとワイシャツにネ クタイをしている。じつは、あの親父、本名を丸山という。

丸山 酒の話でしたら、私が結婚して間もなくの頃、丁度三十五歳でしたか、まだ巡査部長でしたが、上司が、突然、上物のウイスキーを手にしてやってきましてね。今日はきみと飲もうと思うんだが、最初に断っておくが、飲むのはこの瓶の半分だ。というんです。残りは別の者と飲むのかと思っていましたら、帰り際に、なるほど、丁度、ウイスキーが半分ばかり残っていました。私は若かったもんですから、飲んでしまいましようよと、そういったんです。そうしたら、きみ、酒というのは残しておくもんだよ、と、そういうんです。妙なことをいうなとだけ、その晩は思っていました。ところが、上司を見送った帰りに、酩酊していますから、情けないですが、転んでしまいましてね。いやあ、鼻っ柱をぶつけました。で、翌朝、鏡を覗ながら、ひでえなあと思っていたら、女房が、あなた、半分残っているウイスキー、どうします、と、こういうんです。ああ、そうだ、まだ半分あったなと、そう思った途端、何だか元気になるましてね。上司がどうして、半分だけ残しておけといったのかワカリマシタ。苦労人というのは、そういうもんですね。

黄村 丸山さん、酒の話はいいですよ、もう。ここでは私は一応、飲めないんですから。

丸山 ああ、いや、どうも、すいません。妙な仕事を頼んでしまつて。

黄村 ええ、それはお引き受けいたしました。たしかに。

丸山 で、これが、頼まれていた、報告書です。(と、封筒を差し出す)

黄村 これは、アトで、検討します。それより、交換条件のほうをお願いします。

丸山 ああ、あれですか。

黄村 そう。

丸山 それほど、面白い話じゃありませんよ。

黄村 いいですよ。

丸山 黄村さんのお気に召すかどうか。

黄村 ともかく、聞かせていただきましょう。

丸山 あれは、私がまだ駆け出しの頃でしたから、ずいぶん前になります。若い男が自殺しました。死ななくてもよかつたんです。男は十九歳、名前は鶴田新介、女はこれも十九で、小森さよ。新ちゃん、さよちゃんと、呼び合っつていそうです。さよの話によりますと二人は井の頭公園でよくデートをしたらしいです。それも、夜中にです。二人とも貧乏だったので、そういう時間に、そういうところで逢うしかなかつたんですよ。さよがいました。私がいけなかつた。みんな自分が悪い。

黄村 何故ですか。女が何かしたんですか。

丸山 いいえ、一言、こういったんだそうです。一緒に帰れる家が欲しいわね。鶴田は会社の寮に住んでいました。さよは、姉のところの一間を借りていました。鶴田の会社

は下請けの工場で、寮といっても、六畳一間です。二人して、田舎から東京に出てきたんですな。鶴田には、東京に兄がいましたが、この兄がろくでなしの酒飲みで、一応結婚をして子供まであるんですが、家にはなかなか寄りつかない。家といつても、肉屋の二階に間借りしていたワケで、まあ、放蕩なヤツでした。女房のほうも、お水だったんですが、子供が出来たので、事実婚の関係になっただけです。一緒に帰れる家が欲しいわね、これを笑える若者が、いまの日本にどれくらいいるでしょうか。

黄村

かつて、寺山修司は『家出のすすめ』を書いたが、いまでは、帰れる家がナイ。

丸山

恋の会話など陳腐なものですが、この、さよのコトバは、柄をもとおれと鶴田の胸を突き刺した。家、家か、アパートくらいなら借りられる。頭金さへあれば何とかなる。鶴田は、さよを吉祥時まで送っていくと、高円寺行き切符を買って、兄の住んでいる肉屋に真つ直ぐ足を向ける。店では、肉屋の親父がほうちよう研いでいる。兄さんは、お出かけのようですが、どこへ、さあ、また、飲みにいったのか。姉さんは、お二階でしょう、鶴田が二階に上がると、兄貴の嫁は生まれたばかりの女の子に乳をふくませて添い寝していました。貸してもイイって兄貴はいつたぜ、そんなこと、あのひとの一存では決められませんよ。私にだって都合があるんだから、どんな都合、そんなこと、お前にいう必要はナイ、家が借りたいんだ。結婚しようと思ってるんだ、笑っちゃうね。子供のくせに、このコトバを聞いて、鶴田は一階に降りると、肉きり包丁を手にした。借りるよと、いい棄てて、階段を駆け上がると、いきなり、やった。姉は声もたてずに倒れる。血が吹き出して鶴田の顔にかかる。傍にあった子供のおしめで顔を拭いて、一階に降りると、レジから売り上げをわしづかみにしてジャンパーのポケットにねじ込み、一目散に逃げた。

黄村

肉屋の親父は。

丸山

これが、あいにく、トイレ。

黄村

そこで命運が分かれたか。

丸山

鶴田は東京までの切符を買う。いつもは、スーツとやって来る電車がなかなか来ない。悪寒がしたでしょう。尿意もあったでしょう。叫びたい気持ちにもなったでしょう。電車が来た。混んでいる。人いきれで、呼吸も苦しい。吉祥時、西荻窪、電車のろい。高円寺、降りようか、さよちゃんに、逢っていいこうか。ダメだ。家は借りられない。姉を刺し殺したことなど、すっかり忘れていて。家が借りられなかった悔しさだけで胸がいつぱい。恋をしている者の胸中とは、そういうもんです。

黄村

なるほど、それは察するに余りある。

丸山

東京駅に着いた。かつて上役のお供でいった店が日本橋にある。そこに入る。血飛沫のあとを、水道で洗う。洗っても落ちぬ。そこで裏の焼却場に棄てた。店に上がる。ウイスキーを注文して、女を呼んだ。金ならある。飲んで、さよちゃん、ゴメン、といったと思う。それは遺書に書かれてましたからね。その店に二日居座って、飲んで眠り、飲んで眠り、女に新聞を買いにやらせたが、自分の記事は一行もナイ。やがて三日目、ウイスキーを飲んでも吐くだけになった。店を出る。尾行されているのではナイかと、後ろが気になる。四日目、会社の寮に戻った。同僚が、鶴田に、兄さんからすぐ来いと電話があったと知らされる。いよいよダメだ。自首しろということ



だ。ワカッテイル。もう死ぬしかなイ。便箋に数枚、遺書のようなものを書いた。会社はシアンを扱っている。青酸カリだ。これを飲む。息絶えた頃に、兄貴と、腕に包帯を巻いた兄貴の女房が駆けつけた。と、こんなもんです。

黄村 若い者の阿呆らしい恋愛も、バカにはなりません。

丸山 死ぬことはなかったと、思いますかね。

黄村 世界が狭いんです。若いということは、若さの分だけの世界しか知らない。いや、いい交換条件でした。

丸山 だと、よろしいんですが。で、この一件は。

黄村 丸山さんにいわれたように、それなりに調査をしました。おそらく院長の死は、事故でも自殺でもなく、他殺です。

丸山 市川侯爵との関係は。

黄村 あるでしょう。今度の事件は、市川侯爵がここを売らねばならなかった、その時代にまで遡ると思われます。

丸山 では、私の親父の捜査は。

黄村 間違っていないかっと思ひます。

丸山 そうですか。

酒井が通りすぎようとする。そのアトを杉田が追ってきて、さらに高木が。

杉田 バルブ開けるだけでイインです。

酒井 バルブを開けてどうするおつもりなんですか。

杉田 ですから、庭を蘇生させたいんです。

酒井 その前に、あなた自身を蘇生させないといけません。

杉田 私は、院長にも交渉したことがあるんです。

酒井 断られたんですよ。

杉田 院長は、いつも、あの窓の窓枠に腰掛けて、庭を覗てらっしゃいました。私は院長室まで掛け合いに行っただんです。

酒井 院長室まで。(と、不審な顔をする)

杉田 邪険に断られたから、突き落としてやりました。

丸山が立ち上がるうとするのを、黄村が諫めて。

酒井 また、そんな嘘をいう。

杉田 ほんとだ。俺が殺したんだ。

酒井 (動じない) 院長室には、院長以外、患者さんは入れません。

杉田 知ってるよ。でも、酒井先生、あなたは、たびたび、入ってたろ。

酒井 私が。

杉田 院長室で、二人で、何してやがったんだ。

高木 杉田さん。

酒井 杉田さん。また痛い注射しましょうか。

杉田 だから、バルブを。

酒井は無視して行ってしまった。

高木 杉田さん。諦めましょうよ。この療養院の仕来りなんだから。

杉田 この庭がこんなふうである限り、俺の病気は治らないよ。

高木 まあまあ、あつちで一杯、といきたいんですがね。そういうことが出来ないところだしなあ。

高木、杉田を宥めながら連れていく。

黄村 杉田さんに、高木さんです。もちろん、本名じゃアリマセンが。

丸山 バルブとかいってましたが。

黄村 杉田さんというのは、庭師なんです。この庭の手入れがしたいんです。それには水が必要だというワケです。

丸山 水なら、例の水族館にいっぱいあるのにねえ。

黄村 丸山さん、ありゃあ、水族館じゃアリマセンよ。

丸山 ああ、そうでしたね。水族館になったんでしたね。

黄村 とところで、ハンザキ大明神のほうは。

丸山 岡山県の寒村まで行って参りました。かつては盛んだったらしいですが、ここ十年近くは行われていないようです。

黄村 予算の関係ですか。

丸山 村自体が寂れてましたからねえ。

黄村 なるほど。

丸山 しかし、御神体は残っております。

黄村 やっぱり。

丸山 祭りの道具はみな、揃って残っていました。

黄村 で、あるならば、充分です。

水族館。対峙しているのは、黄村先生と、酒井女医。

黄村 はじめにお断りしておかねばナリマセン。私は、この度の事件の犯人を捕縛しに参ったわけではありません。

酒井 犯人。捕縛。どういうことかしら。

黄村 私は、この度の事件をミステリ文学として扱いたい、ただそれだけのことです。

酒井 ますます、意味不明ですわね、黄村元東京帝都大学教授。

黄村 なるほど、私がどういう人物であるかは、もうワカッテらっしゃる。ニセモノの入院申請は役に立たなかったということですね。

酒井 もちろん。しかし、教授の入院目的までは存じあげません。

黄村 まあ、そんなことはどうでもよろしい。ともかくも、こんなところにお呼び立てして、恐縮です。ほんとうは院長室で、お話がしたかったのですが、患者は入れないということなので。

酒井 いまは、警察関係者以外は入れませんわ。

黄村 ええ、私はその警察関係者というのでもナイんです。

酒井 では、ひよつとすると何方か、ご依頼で、何かを。

黄村 ええ、丸山という退職した刑事がおります。ちよつとした飲み友達でしてね。

酒井 飲み友達というのは、ここでは相応しいコトバではありませんわよ。

黄村 そうでしたね。

酒井 で、折入って、私に御用とは。

黄村 三週間ばかり前に、この院長が、三階の院長室の窓から落ちて命を落とされました。落ちて落とす。こりや、オモシロイ。

酒井 (能面のような表情は変わらない) 御用の件を。

黄村 落ちて落とすにオチをつける。これが私への依頼です。

酒井 (笑む) 落語みたいね。つまり、あれは事故ではナイとおっしゃるのね。

黄村 ええ、殺人です。院長は突き落とされました。

酒井 誰にです。

黄村 身の丈三尺のオオサンショウウオにです。

酒井 何をおっしゃっているのかしら。ほんもののアルコール依存者のようすわ。

黄村 ここは、もともと、市川侯爵のお屋敷ですね。

酒井 そう聞いておりますが。

黄村 それが売却された。

酒井 華族の多くは生活に困窮したと聞いています。華族の銀行と呼ばれた十五銀行が

1927年に破綻した際には多くの華族が財産を失ったようすです。1947年に貴族制度は廃止。推計によると、創設から廃止までの間に存在し華族の総数は1011家。天皇ですら戦後、皇室37億1563万円の資産に対し、33億4268万円の財産税が課せられています。これは、現在の価値に算出すると数兆円規模になるそうです。

黄村 それらが、プリンスホテル・日本武道館・国立公園の森林・門跡寺院・現在ニュータウンになつたワケですな。

酒井 ええ、そのようです。

黄村 市川侯爵もまた裕福というのではなかったワケですね。

酒井 そうなんです。どうしてそんなことを私にお聞きになるんです。

黄村 知ってらっしゃるからですよ。

酒井 それはどうかしら。でも、市川伯爵は、いまの院長にこの全ての不動産財を売却したそうですけど。

黄村 おそらく二束三文の値段ででしょう。何故なら、それだけ、いまの院長の実家に対して借財があつたから。院長の実家は皮肉にも、造り酒屋ですね。戦中戦後に、清酒とはいわないまでも、合成酒を造つて多大な財を成した。しかし、それまでは一軒の小さな酒屋だった。この療養院の正面にある酒屋がそうです。それが為か、あの酒屋は取り壊さずにそのまま営業を続けてます。まあ、原点といったところなんですよ。

酒井 よくご存知ですね。

黄村 丸山さんに調べてもらったんです。当時、まだ若かつたこの院長は、市川侯爵の研究の助手のような立場で、ここにいらしたようです。その傍ら市川侯爵の勧めで医大のほうにも通つてらっしゃつた。

酒井 そうなんです。市川侯爵の研究って、いったい何の研究ですか。

黄村 山椒魚です。

酒井 山椒魚。

黄村 ええ、サン、シヨウ、ウオ。それは、華族の趣味としての研究をこえて、本格的な山椒魚の繁殖実験であつたようです。

酒井 山椒魚を繁殖。何のために。

黄村 食料です。市川侯爵は真面目な学究肌だったようです。当時の日本の食料難をかいまみて、あるいは、現在の飢餓状況を予想してか、山椒魚を繁殖させ、これを養殖して、食料に出来るように考えてらしたようです。

酒井 よくお調べですね。

黄村 みな、丸山さんが、いや、彼の父親が残した調書にあることです。

酒井 調書という。

黄村 市川侯爵はここを売却されのち、消息不明になりました。それから三年後に瀬戸内海のある海浜で、水死体で発見されました。丸山の父親も刑事です。彼は、その事件のことを調べていたのです。残念ながら、途中で病気で亡くなっています。

酒井 そうなんです。初耳ですわ。

黄村 (水槽を観て) この水槽は、水族館と称されていますが、かつては、単に山椒魚を育成するための水槽だったんですね。

酒井 それは知りませんが。

黄村 では、院長は、あなたには、こういう写真をおみせにはならなかつたんですね。

黄村は小脇に挟んだアルバムを開いて、彼女に向けた。

酒井 その写真は何処から。

黄村 某所。

酒井 院長室にお入りになったんですね。

黄村 不法侵入で訴えますか。

酒井 たしかに、そういうことは、多少、院長から聞き及んでいます。

黄村 この院長も、ここで、市川侯爵の研究を継続しています。しかし、オオサンショウウオは1951年に特別天然記念物指定で採集、飼育が禁止され、ワシントン条約附属書指定で国際取引も禁止されました。そのため、こいつは内緒でやらねばならない。そこで、考えたのが、世間からの隔離、アルコール依存症の治療施設でした。

酒井 じゃあ、院長は、ここで、山椒魚の養殖を試みよう。

黄村 たぶん。しかし、それは市川侯爵の研究成果が手に入らなければ成し得ないことだったでしょう。つまり、頓挫。現在、何処にもその形跡はありません。しかし、当時の写真なら（と、またアルバムをみせて）ここにありますが。たいていのモノは警察が押収していったようですが、こういうものを秘密の隠し場所からみつけ出すのは得意ですね。

酒井 そういふ院長の過去と、そんな写真が私にみせたいから、私との接見を希望されたんじゃないんですよ。

黄村 岡山県の真庭市の奥地の寒村に、天然の山椒魚が棲息しているのですが、ハンザキ大明神というのが祀られていますね。ちよいと前までは、ハンザキ祭りというのがあったそうです。そこはむかし、ハンザキ村と呼ばれていたそうで、市川侯爵も、そこを何度も訪れています。おそらく消息を絶つてから、市川侯爵はそこにいたんですよ。

酒井 それと私が、どういう、

黄村 （酒井のコトバは聞き流しているかのように）ハンザキ祭りには、身の丈三丈のオオサンショウウオが、これは山椒魚の化け物なんです、こいつが出てきて退治されるという、まあ、どこにでもありそうな、神話伝説の類です。その身の丈三丈のオオサンショウウオは、蛇腹で造られていますね、たたむと小さくなって蔵にかたづけられることが出来ます。祭りが無くなってからは管理がずさんですから、持ち出してもワカリマセン。

酒井 率直にいわせてもらいますが、私はそのようなものは知りません。市川侯爵とも何の関係もありません。

黄村 酒井先生の出身地など、調べても無駄です。そんなものはいくらも改竄することが出来ます。

酒井 私生まれは四国の、

黄村 市川侯爵は生涯独身でした。子供はありません。私は金田一耕助じゃありませんから、そんな系図などには興味はナイ。酒井先生と市川侯爵との関係にも介入する好奇心もアリマセン。ただ、あのお絵描きさんが観た黒い影というのは、ほんとうに身の丈三丈のオオサンショウウオであったということに、マチガイはナイ。

酒井 まさか、私がオオサンショウウオの被りものを身につけて、院長を、  
黄村 それを私が勝手にミステリ小説に書く。それだけです。そいつを承諾して頂こうと

思い出してね。

酒井 いったい、何の恨みを、院長に対して、私が何の恨みを、

黄村 それも訊く必要はナイ。現実のほうは警察の仕事です。私の仕事は虚構です。しかし、現実と虚構は共存している。と、これは、もちろん私の持論でしかアリマセンが。

酒井 お好きなように、お書きになればよろしいじゃないですか。

黄村 承諾して頂けましたか。いやありがとう。

酒井 どうぞ、ご勝手に。(去ろうとするが)

黄村 ああ、酒井先生、一つうかがいたいのですが。

酒井 (振り向きもせず) 何ですか。

黄村 あの廃園です。廃園の存在は、何が為です。

酒井 (あたかも告白だ) 山椒魚の育成において、これを人工繁殖、養殖するには、水と土壌が決め手である。山椒魚が絶滅危惧種に近くなったのは、両棲類として、淡水の流れる川を選んだのが原因だ。繁殖に適した水と土、それは魚類から両棲類に進化する過程の水と土壌でなければならず、天水、雨水の伏流水と特殊な土。その土壌と水を創ることが可能だ。しかし、この庭園への貯水場からの水は使えない。また庭園の土壌を変えるには、相当の時間を要する。よって、山椒魚の繁殖のためには、この庭園を犠牲にしなければならない。市川侯爵の日記にそうあったような気がします。記憶はさだかではアリマセンが。

黄村 なるほど、庭園と山椒魚繁殖とは、土壌と水が両立出来なかったのか。

酒井 庭園の土壌を変えるのに、まずバルブの水が閉じられました。しかし庭園を繁殖用の土壌の場に変えるのには、大がかりな工事と時間が必要だったようです。そんな資金は調達出来ず、それに、それこそが、秘中の秘、誰にも口外せず、と。

黄村 この助手であった院長は、その研究成果を記した日記欲しさに市川侯爵を巧みに呼び出す。しかし、交渉は決裂となる。そこで、と。ただ、未だなお、夢覚めきれず、公園のバルブは閉じられたままか。いや、これは私の虚構ですから、聞き流して下さってけっこう。どうもお手間をとらせました。

酒井、足早に去っていく。

黄村 (水槽に向かって) ここに残された数匹の山椒魚に訊ねる。きみたちが、海から陸に上がったのは、何のためだ。何故そのような苦しみを進化の跡に残した。私たち人類もまた、この先、そのような苦しい進化を遂げねばならんのか。

廢園の噴水に座って、黄村先生は丸山と何やら話している。

お絵描きさんは、いつものところでスケッチ。

武道家は、今度は鍋の木蓋を片手に、たぶん、塚原ト伝に鞍替えしたのだろう。

丸山 そうでしたか、なるほど。

黄村 そうでしたよ。

丸山 で、

黄村 いえ、特に。

丸山 そんなものでしょうね。

黄村 そんなもんですな。

谷水・海野がやって来る。

丸山を観て、

海野 あれっ、

谷水 どういうことなんですか。

丸山 いやいや、ははは。

黄村 謎ですよ、謎。悠久の謎。どんな探偵だって何も彼も知っているワケじゃない。

海野 あの、私、調べたんですけど、山椒魚って、捕獲したり飼育したり、

黄村 山椒魚、ナンですか、それは。そんなものにまだ興味があるのですか。ここの山椒魚は、絶滅危惧種でナイものを研究用に申請したんでしょう。私はね、今度は茶道をやってみようかと思っています。

谷水 茶道って、お茶ですか。

黄村 そう。千利休が如何にくだらない人物であったかを書きます。何がわびさびの美ですか。秀吉と意地の突っ張りあいをしただけじゃナイですか。ツマラナイ人間だ。突っ張りあいなら相撲取りでもやります。

谷水 まあ、我々は原稿さへ頂戴出来れば。

と、噴水から水が流れてくる。

海野 あらっ、水が。

谷水 ほんとだ。

黄村 やりましたな、杉田さん。バルブを開いたようですね。

それぞれ、その水を眺めている。

2  
0  
1  
2  
/  
0  
2  
/  
0  
8